当世噺家気質　その218

三遊亭歌武蔵と「茶金」

２００９年１２月２４日の第４９８回以来、当会での口演は２度目となる。１２年ぶりとなれば、前回とどこが違うのか、どんな工夫を加えたのかが気になるところだ。

「あたしは、このネタと決めたら、そればかりダーッと演じるタイプすね。あの頃も、覚えたての『茶金』を頻繁にやっていました。ただ、４０歳そこそこのあたしにはちょっと荷が重かった。そのうちだんだんやらなくなって・・・。前回との違いと言われても答えようがない。今回はネタおろしと同じですよ」

『茶金』は真打ち昇進後、いなせや半七に教わった。

「以前から上方落語がやりたくうてね。半七師匠は山口県出身で大学まで大阪だったので、関西弁を操れる。教わるならこの人だと思って、他に『算段の平兵衛』や『有馬小便』なんて上方ネタも習っています」

歌武蔵自身も岐阜出身なので、上方言葉に抵抗感がない。ただ、『茶金』は、若い歌武蔵が考えた以上にの難物だったのである。

「セリフと噺の運びは変わりませんよ。でも、４０代のときと、５０代で演じる『茶金』は違うのが当たり前。良い形で違ったと思ってもらえればなあ」

前回の高座では、噺の中に登場する歌で苦労したという。

「水の漏れる茶碗を見て『はてな』と思った偉い人が次々と歌を詠むんです。どれも似たような言葉が出てきて、微妙に違うの。面倒くさいんですよ」

「茶金さん」こと茶屋金兵衛が「清水の音羽の滝におとしてや」と詠み、近衛殿下が「音なくてしたたりり落つる清水焼」と続き、最後に時の帝が「漏りいでし岩間の清水流れてそ」。歌の違いと味わいが噺の「品格」にもかかわるから、疎かにはできない。

「教わった当初は、三つの歌を書いたメモを手ぬぐいにセロテープで貼り付けてカンニングしてたんだけど、ある時、手ぬぐいを出して読もうとしたら、上下が逆さま！　今更手ぬぐいをひっくり返すこともできず、大汗をかきました」

上方版「はてなの茶碗」の代表的な演者である桂米朝は「ある程度の年齢と風格が要求される」と言っていた。５０代半ばに差し掛かった歌武蔵の再挑戦には、否が応でも期待が集まる。

「噺家は稽古が仕事で、高座は集金の場だと思っています。しっかり集金できるように仕上げなければ。まあ、お客様には申し訳ないけど、研究会の前後も含めて『茶金』が続くと思います」

名作落語のサゲを気取って、客席で『また茶金かァ』とつぶやいてみたくなった。

『茶金』の後は、『船弁慶』や『貧乏花見』などの上方落語の定番にも挑んでみたいという。それなら、『また上方かァ』だ。

☆ 長 井　好 弘（演芸評論家）
1955 年 8 月 10 日、東京・江東区深川新大橋生まれ
元読売新聞編集委員。都民寄席実行委員長。
浅草芸能大賞専門審査員。
『僕らは寄席で「お言葉」を見つけた』
『新宿末広亭のネタ帳』
『寄席おもしろ帖』
ほか著書・編書多数。
TBSテレビ主催　第五次「落語研究会」プログラムに
2003 年 3 月から「当世噺家気質」を執筆中